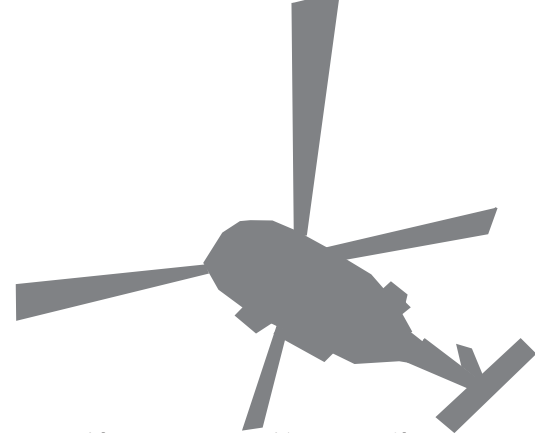


普天間基地はいりません 新基地建設に反対します



危険な普天間基地

普天間基地は宜野湾市にあり、海兵隊のヘリコプターなど約50機が駐留しています。基地が市の中心にあり市面積の25%を占めるため、交通網や公共施設の整備ができず、市の発展は妨げられてきました。

基地のヘリコプターは、市街地上空での旋回訓練を1日に150回から300回行います。ひどい時には民家の上空を、30秒おきにヘリコプターが通過するのです。日米政府は1996年に騒音防止協定を結び、住宅密集地・学校・病院の上空での飛行禁止、夜10時から朝6時までの飛行禁止を定めました。しかし、米軍は約束を守りません。



宜野湾市の中心部を占める米海兵隊・普天間基地。滑走路のすぐそばまで、住宅地が接近しています。

離陸直後のヘリが沖国大に墜落

2004年8月13日、普天間基地のヘリコプターが、隣接する沖縄国際大学に墜落しました。市民の死傷者は出ませんでした。機体は炎上して校舎の壁面を焼き、ヘリの破片は住宅地に飛散しました。

実はこの墜落事故の前から、日米政府は普天間基地の危険性を知っていました。1995年に起きた海兵隊による少女暴行事件を契機に、日米はいくつかの米軍基地の縮小や閉鎖で合意しました。その中には、普天間基地の閉鎖も含まれていたのです。

しかしそれは、名護市辺野古に代替の基地を建設することが、前提となっていました。



ヘリコプターが墜落した沖縄国際大学。炎上するヘリの黒煙が、周囲を覆いました。(写真提供：宜野湾市)

辺野古では体を張った住民運動

辺野古は沖縄本島東海岸の小さな漁村です。沖合にはサンゴをはじめ希少生物が生存し、絶滅危惧種のジュゴンも確認されています。付近には海兵隊のキャンプ・シュワブがあり、演習なども行われていますが、開発の進んだ沖縄本島の中では、自然が残る貴重な地域です。

名護市の住民は、日米政府の頭越しの合意に強く反発し、97年に行われた基地建設を問う住民投票では反対が過半数を占めました。そこで国は見返りの地域振興策を次々と打ち出し、やがて市長も市議会も基地賛成となってしまいました。

そうした中でも住民は、工事を行おうとする国や業者に対して、体を張って抵抗しました。その結果、05年には辺野古での新基地建設は一旦白紙に戻ったのです。

ところがその直後、日米政府は普天間基地の辺野古移設を加速化する新しい合意を結びました。沖縄県民の反発はさらに大きくなり、昨年の県議会選挙と今年の衆議院選挙では新基地建設反対の候補者が勝ちました。「基地はいらない」という県民の意思は明確です。